



イースター島に、なぜモアイ像があるの

部族の守り神とか、祖先とかいわれている

イースター島は、南太平洋の東部にある島で、先住民が残した多くのモアイとよばれる巨大な石像がある島として、有名です。

イースター島のモアイは、アフ(祭壇のようなもの)にのっています。アフは、切り石を積み重ねた30メートル×100メートルの台座で、その上に石像が1～15体ほど、一列に並んでいました。島には、このようなアフが200以上あります。

モアイは、部族の守り神として作られたとか、祖先の部族長を記念するものであるとかいわれています。

モアイは、高さ3～10メートル、重さが3～10トンもあり、中には、50トンをこす巨大なものもあります。

こわれたモアイ像を修理した日本の会社

モアイ像がたおれたままで、あれはてているのを見た日本の会社が、修理しようと立ち上がりました。数10トンもあるようなモアイ像をつり上げて、元にもどすことはたいへんなことなので、学者や建築会社などの専門家が集まり、モアイ修復日本委員会が組織されました。そして、多くの人たちの協力で、1995年5月、15体のモアイ像が修理されたのです。

(監修・青木 国夫)

